別紙様式１

令和２年度　学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	□共同研究推進経費　□若手教員研究支援経費　☒個人研究支援経費
プロジェクトの名称	路面電車ルネサンスの実現と挫折に関する思想史的研究
報告者氏名・所属・職名	田村伊知朗・函館校・教授
プロジェクト担当者氏名・所属・職名	田村伊知朗・函館校・教授

研究内容及び成果の概要

本研究は、近代の時代精神を媒介にしながら、都市における旅客近距離公共交通(Öffentlicher Personennahverkehr: ÖPNV)の存在形式を問題にする。とりわけ、路面電車ルネサンスという事象に着目しながら、都市の公共的な旅客輸送の存在形式に限定して考察する。

本研究の目的は、路面電車ルネサンスをたんに、交通政策史に置いて考察するのではなく、近代思想史総体において位置づけることにある。この観点が本研究の独自な意義と関連している。路面電車ルネサンスを交通手段の変容として考察するだけではなく、近代の社会＝政治思想史においてその意義を顕揚しようとしている。

第一に、本研究が依拠した哲学思想は、19世紀中葉におけるヘーゲル左派、ブルーノ・バウアー(Bruno Bauer）の純粋批判の哲学である。この哲学は同時代のヘーゲル左派、例えばカール・シュミット(Karl Schmidt）等に受容された。バウアーの自己意識の哲学を除き、両者の哲学は、本邦においてほとんど研究されていない。第二に、本研究が依拠した思想は、パナヨティス・コンディリス（Panajotis Kondylis）の大衆民主主義論である。本研究は、近代論をバウアーとシュミットの哲学思想に、後期近代論をコンディリスの社会学に依拠している。

まず、大衆民主主義が1950～1960年代において現象し、原子化された個人主義が極度に進展した。自立的かつ同権的かつ同価値的な大衆が、社会の普遍的利益への指向性を減少させ、個人的な特殊利益への指向性を増大させた。大衆民主主義という時代精神が、交通形式という社会的な下位領域にも浸透してきた。動力化された個人交通が拡大し、その渋滞なき走行が都市計画者と都市交通計画者の意識を刻印した。動力化された個人交通に適した街という表象が、善なるものとして一般化した。大都市における地下鉄と都市高速鉄道を除けば、中小都市において公共交通はバスに一元化され、路面電車の軌道が撤去された。しかし、バスは動力化された個人交通との競争に敗北し、公共交通自体が衰退した。

次に、自然的紐帯から解放され、原子論的に解体された諸個人が、後期近代において新たな都市公共性を設定し、それに対する責任性を明確にし始めた。動力化された個人交通に適した都市構造が、交通浪費、エネルギー浪費、都市平面浪費として特徴づけられ、批判的に考察され始めた。この思想は、路面電車ルネサンスとして西欧、そしてドイツにおいて具現化された。

但し、新たな公共性が形成されつつあったが、個人主義を凌駕したわけではなかった。公共性への責任倫理が、第一義的な社会規範になったわけではなかった。路面電車ルネサンスは、ドイツにおける限定された都市においてだけ開花し、多くの他の都市において開花しなかった。本研究は、この事象が成功しなかった根拠を近代の社会＝政治思想史観点から考察した。

また、本研究は、ドイツだけではなく、本邦の路面電車ルネサンスにも考察対象を拡大している。路面電車ルネサンスという社会的現象は、本邦でも、富山市と宇都宮市において開花した。とりわけ、この交通政策上において特筆されるべき事象も、かなりの障害を克服しなければならなった。その障害を乗り越えた契機の一つが、地方自治体と国土交通省都市局との密接な関係であった。本研究は、地方自治体の副市長人事に焦点を当て、その意義を実証的に考察した。さらに、将来的に、本研究の成果の一部をドイツの学術雑誌に投稿することも視野に入れている。

成果の公表の状況

【学術論文】

田村伊知朗「日本の路面電車ルネサンスの知られざる側面――富山市と宇都宮市の地方自治体の行政組織の変容と、上位水準との同一目的的協働の不可避性」『北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)』第71巻第2号、令和3年3月、33-46頁。

教育現場で活用可能な分野・教材等	
配布又はダウンロード可能な資料	
問合わせ先	代表者：田村伊知朗 電　話：0138-44-4261 FAX　： mail　：tamura.ichiro[at]h.hokkyodai.ac.jp